

## 70 日間の長期寄宿体験が及ぼす教育的効果 — 児童の行動変容プロセスに着目して —

### The Educational Effect of 70days Long-term Boarding Experience — Focusing on Children's Behavior Change Process —

○本村明夏（国立日高青少年自然の家） 平野吉直（信州大学） 瀧直也（信州大学）

キーワード：行動変容プロセス、長期、寄宿体験、小学生

#### 1. はじめに

長野県諏訪市の蓼科保養学園では、小学 5 年生が親元を離れ自然体験、生活体験、社会体験が数多く組み込まれた 70 日間の長期寄宿体験を送っている。また、併設されている学校では、学習指導要領に基づく教育が行われている。

長期の宿泊体験や自然体験活動などの教育的効果については、これまで数多くの研究がされてきたが、長期間の活動に参加した児童の具体的な行動変容を扱った研究は報告されていない。そこで本研究は、蓼科保養学園の教育的効果を明らかにするため、児童の具体的な行動変容プロセスに着目し、70 日間の長期寄宿体験が及ぼす教育的効果を検証することを目的とする。

#### 2. 研究方法

##### (1) 蓼科保養学園の概要

蓼科保養学園は、大正 12 年に虚弱児童の心身の鍛練と体位の向上のための施設として創設された。現在は、諏訪市の児童福祉施設となり、子どもの心と体の健康づくり、精神面での自立の促進、蓼科の恵まれた自然とのふれあいの推進を目的に運営されている。入園対象児童は、諏訪市内の小学 5 年生であり、年間 4 期、各期 40 名の児童を募集している。18 名の職員（園長、児童指導員、保育士、教員等）が、児童の学習指導や生活指導、健康管理など、学園生活全てのサポートを行っている。日常生活は、日課表に沿って行われ、児童はホームと呼ばれる部屋で 4~5 名で共同生活を送る。毎日運動の時間があり、主にマラソンと竹馬に取り

組む他、キャンプやネイチャーゲーム、スキー教室などの行事が行われている。

##### (2) 行動変容プロセス調査

###### ①調査対象及び調査内容

指導者 6 名に、平成 X 年第 Y 期入園児童から男子 2 名、女子 2 名、計 4 名の調査対象児童を選出し、行動を観察するよう依頼した。児童の行動変容について、入園当初、中盤、退園後の計 3 回のインタビュー調査を行い、データを収集した。

###### ②分析方法

本研究では、データに密着した分析から独自の理論を生成する、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) を分析方法として採用し、指導者のインタビューデータから調査対象児童それぞれの結果図及びストーリーラインを作成した。

#### 3. 児童の行動変容プロセス

4 名の調査対象児童に関するインタビューデータを M-GTA を用いて分析した結果、以下のことが明らかになった。

①児童 A の行動変容プロセスは、〈何事にも自信がない姿〉から〈意欲の高まり〉へ、さらに〈意欲を持って取り組む姿〉へと変化したことが読み取れた。また、〈何事にも自信がない姿〉から〈友達との関わり〉を持つようになり、それが〈意欲の高まり〉と〈意欲を持って取り組む姿〉に影響を与えていたと読み取れた。

②児童 B の行動変容プロセスは、入園当初、〈指導者との関わり〉を求めていたが、[指導

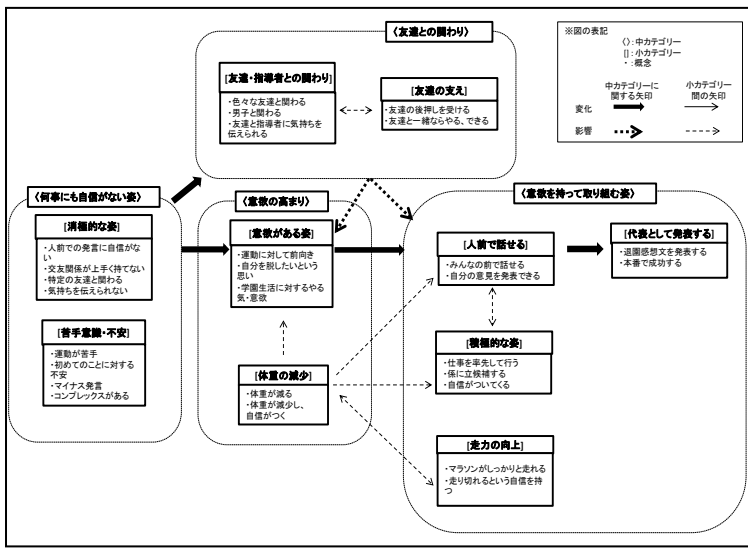


図1 児童Aの行動変容プロセスモデル

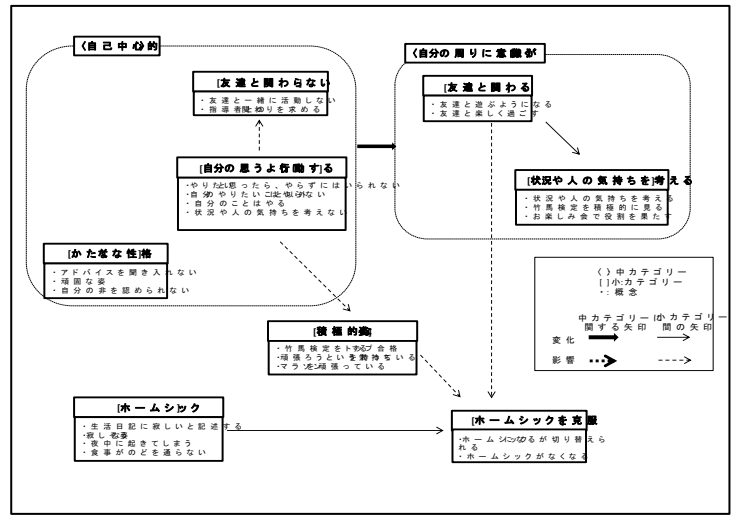


図3 児童Cの行動変容プロセスモデル

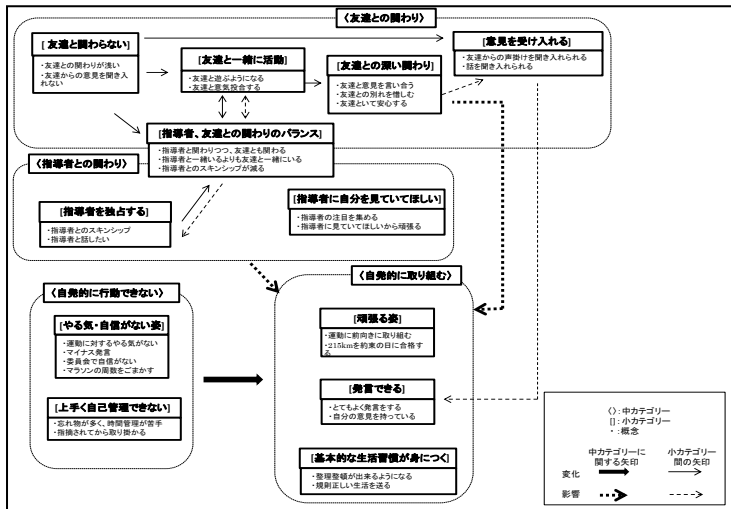


図2 児童Bの行動変容プロセスモデル

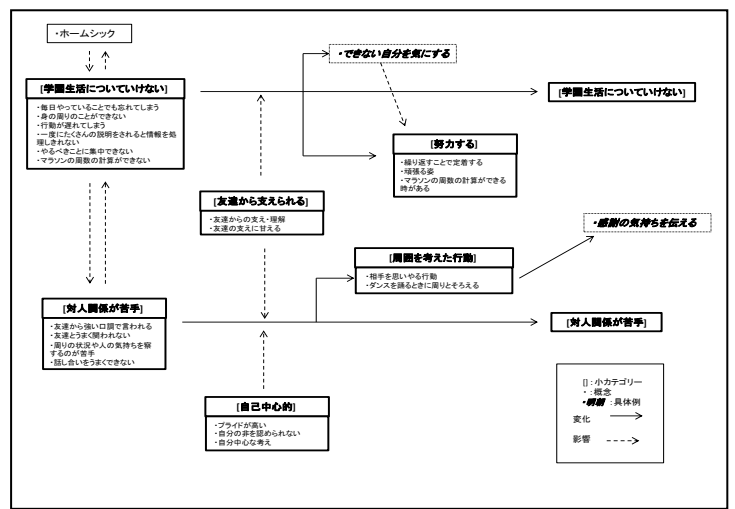


図4 児童Dの行動変容プロセスモデル

者、友達との関わりのバランス]が変化することで、〈友達との関わり〉が深まっていったことが読み取れた。また、〈自発的に行動できない〉姿は〈指導者との関わり〉と〈友達との深い関わり〉から影響を受け、〈自発的に取り組む〉ようになったことが読み取れた。

③児童Cの行動変容プロセスは、〈自己中心的〉だった様子が〈自分の周りに意識が向く〉ようになったことが読み取れた。また、入園当初[ホームシック]を感じていたが、積極的に活動することや友達との関わりが影響して、[ホームシックを克服]したと読み取れた。

④児童Dの行動変容プロセスは、[学園生活についていけない]様子、[対人関係が苦手]な様子、[努力する]姿、[自己中心的]な姿、[友達から支えられる]姿、[周囲を考えた行動]をする姿が学園生活を通して見られた。加えて、小カテ

ゴリーは形成されなかったものの、ホームシックを感じている姿が見られた。また、概念を形成できなかったが、できない自分を気にする姿、学園生活終盤に友達に感謝の気持ちを伝える姿が見られた。

#### 4. まとめ

児童の行動変容に関するデータを分析した結果、調査対象児童は、「意欲を持って取り組める」「友達と深い関わりを持つ」「自分の周りに意識が向く」「自発的に取り組む」「ホームシックを克服する」といった望ましい行動変容をしていることが明らかになった。これらの変容は、友達との関わり、運動への取り組み、70日という長い期間が、児童の自信や意欲、児童同士の多様で深い関わりなどを生みだし、児童の望ましい変容に影響を及ぼしていたと考えられる。